

田中宏太佳・園田 茂(編)

動画で学ぶ脊髄損傷のリハビリテーション [DVD-ROM 付]

半田一登

(社団法人日本理学療法士協会協会長)

●理学療法士に修得してほしい有機的かつ臨床的な動画本

本書の帯に、『リハビリテーションは「動き」の医療、だから「動き」を見て理解する』と書かれています。これを読んで瞬間的に2つのことを思い出しました。1つはリハビリテーション(以下、リハビリ)の草創期に筆者が所属していた九州労災病院のリハビリ科は医師、作業療法士とMSWで構成されて、理学療法士は整形外科所属の時期があったことです。それは当時のリハビリ科部長の考えで、マッサージを中心とした理学療法士の行為はリハビリとは一線を画すというものであったからです。言い換えれば「動き」の医療が理学療法士に強く求められていました。もう1つ思い出したことは筆者の学生時代に「動きを観察し、それを模倣する」ことが教育の段階でしきりに行われていたことです。例えば、頸髄損傷者のプッシュアップ時における肘の固定法などをつぶさに観察し、それを模倣し、その上で新たな患者を指導するという手法が採られていました。これが本書でいう動きの医療であるリハビリの重要な教育方法であると確信します。

今日の理学療法教育の場ではさまざまな疾患による特異的な動きを観察できる機会は減少しています。臨

床実習前の教育段階で患者の動きを観察する機会がほとんどなく、臨床実習においても臨床実習時間の短縮やリハビリ料での単位制の導入などによって困難性は高まる一方です。その中であって脊髄損傷はリハビリ医療にとって重要な対象疾患でありながら、多くの理学療法士が経験できない疾患になりつつあります。しかし、理学療法士が専門職であるのなら常識として知っておかなければなりません。

また、今日の社会背景の中で理学療法士の関心が高齢者問題に偏り、脊髄損傷に代表される障害者に対する関心が弱まっているように懸念しています。障害者リハビリと高齢者リハビリにはゴール設定に大きな違いがあり、家庭復帰を果たせば成功とされる高齢者リハビリ、社会参加を可能にしなければ成功とされない障害者リハビリ、この違いを乗り越えるためにはそれぞれの疾患別リハビリを十二分に習得しなければなりません。

このような状況下で「動画によって動きを知る」「文字によって手順を確認する」「文字によって留意事項を確認する」という有機的で臨床的な『脊髄損傷のリハビリテーション』本が完成したことは誠に意義深いことと思います。先に出版された『脳卒中のリハビリテーション』に続くこの動画本の完成が今後のリハビリの発展に寄与することを確信するとともに、さらなる疾患別リハビリのシリーズ化を期待しています。

●B5判・152頁

価格 5,985 円(本体 5,700 円+税)

2010 年 医学書院・刊